過疎化や農業の担い手不足により、農村地域は存続自体も危ぶまれる状況である。全国各地で様々な農村振興の施策や取り組みがされているが、功を奏しているものは少ない。この研究では農村振興において弊害となっていることは何かを予想し、それを踏まえて、どうしたら農村振興がうまくいくか考えた。研究の中で、農村振興における弊害を解消できる可能性のある仕組みを考えたので、今回提案したい。

ギブアンドテイクで農村活性化
農村振興の大きな弊害「ヨソモン」意識緩和のために

県本部／東部農業事務所・農業振興課　飯島　麻衣

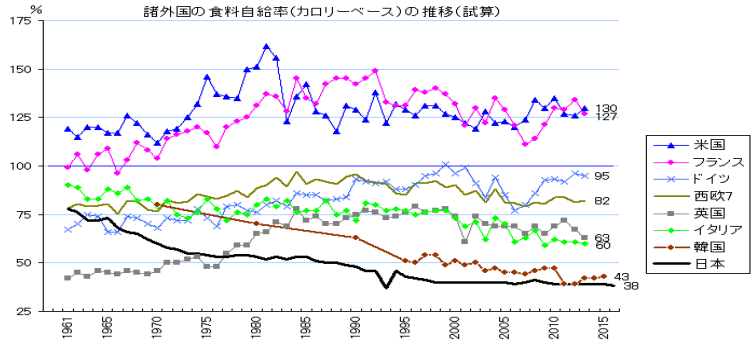
1.　はじめに

（1）　農村振興の重要性

日本の食料自給率は2017年度時点でカロリーベース38％であり、主要先進国（OECD加盟国）の中で最下位である。これは、国内で消費する食料の多くを海外輸入に頼っているということであり、有事の事態を想定したときにゆゆしき問題である。そこで農業者の人数をみてみると、基幹的農業従事者数は、1985年の346万人から、2015年には177万人と、30年の間に半減している。農地面積から言っても、使われなくなって荒れてしまった農地の面積は、H20年度調査で約12万haであったのが、2017年度調査では約28万haと倍以上になっている。

更には、2015年までの5年間で、全国190集落が消滅しており、消滅を危ぶまれる限界集落数は、2016年までの5年間で1万91から1万4375と、4千近く増えている。この限界集落のほとんどが中山間地にある農村地域であり、農村地域は存続自体も危ぶまれている状況である。

以上のことから、農村を振興し、農業の衰退を食い止めることは、日本が取り組むべき最重点課題の一つといえ、実際にこれまで、各地で数多くの施策や取り組みがなされてきている。



（注）農林水産省「食料需給表」、FAO"Food Balance Sheets"等を基に農林水産省で試算。韓国については韓国農村経済研究院「食品需給表」、スイスについてはスイス農業庁「農業年次報告書」による。供給熱量総合食料自給率は、総供給熱量に占める国産供給熱量の割合である。なお、畜産物については、飼料自給率を考慮している。また、アルコール類は含まない。ドイツについては、統合前の東西ドイツを合わせた形で遡及している。西欧7はフランス、ドイツ、イタリア、オランダ、スペイン、スウェーデン、英国の単純平均。

（資料）農林水産省「食料需給表」

（2）　農村振興がうまくいかない理由は何か

全国的に、農村振興施策や取り組みは数多く、様々な手法でされてきているが、その中で実効性をもって長期継続している施策等は多くないと感じる。なぜ農村振興はなかなかうまくいかないのか。

思うに、以下のことが理由として挙げられる。

①閉鎖的になりがちな農村

私自身農村地域で生まれ育ったのだが、農村は人の流入が都市に比べて極端に少ないためか、農村の外の人（他所者。以降「ヨソモン」と表記）に対してどうしても抵抗感を抱きがちであると感じる。特に高齢者にその傾向が強い。例えば県外ナンバーの見慣れぬ車が農村内に停まっているだけでも、「なんだ、あの車は。」と騒ぎになったりするのは農村の独特なところだと感じる。移住者や、観光等で農村を訪れる人がいれば、もちろん歓迎するが、どこか不安感を拭えず、気持ちの上で壁を作ってしまっていることが初めのうちは多いように思う。

ヨソモン側から見ても、農村は外の人や文化との交流が少ない分、昔からの暗黙のルールや独自の慣習のようなものも多いので、入りづらく、なじみにくい雰囲気があると思う。都市部からの移住者を増やすため、農地と空き家をセットにして、補助金を使って低価格で貸す施策もあるが、そのような農村の閉鎖的な空気を感じ取るのか、成約にいたる件数は多くないようである。

②一部の人に過度な負担が生じる

以前みどり市の農業委員が、「一つの取り組みに対して、市町村の中で多数の部局が関わるが、結局、各部署がどの部分を担当・サポートするかということがなかなか決まらず、役割の押し付け合いのようになって進まないことが多い。」と言っていた。確かに、新しい取り組みであるほど、自治体の中で担当部署や担当職員が明確になっておらず、それを端から見た人はやきもきする場面も多いのだろうと想像した。結局、効率のよい役割分担がされず、一部の部署や一部の職員に多くの負担がかかってしまうということもよくあるようだ。

現在自治体で行われている農村振興の取り組みに、農泊やアグリツーリズムがある。都市居住者等に、農村に宿泊して農作業体験をしてもらったりすることであるが、これについては、宿泊の受け入れ先がどうしても一部の農家に偏ってしまうようだ。確かに、一度に何人もの参加者を受け入れるには相応のキャパシティが必要であるし、いくらか金銭を受け取る場合は、きちんとした食事や対応が必要となるので、受け入れ可能な農家はどうしても限られてくるのだろう。しかしそういう場合、初めはよくても、徐々に受け入れ側が負担を感じるようになり、立ちゆかなくなることが多いようである。

このように、農村振興の施策や取り組みの中には、自治体の中の一部の部局や職員、また、一部の農家等に負担が多くかかってしまうものがあるということも、農村振興がうまくいかない理由の一つと考える。

2.　ギブアンドテイクの仕組み作りで農業振興につなげる

（1）　仕組みの内容

・スマホアプリを想定

・まず自分のできることとしてもらいたいこと、及びそれらの対価としての農村ポイント数を設定して登録する。できることとしてもらいたいことは、いつでも変更可能。

（【農村の人たちの例】できること：農作物の提供2NP、してもらいたいこと:農作業の手伝い4NP

【ヨソモンの例】できること：力仕事や車の運転等（NPは要相談）、してもらいたいこと:お取り寄せ不可のお店の商品の代理購入4NP　等）

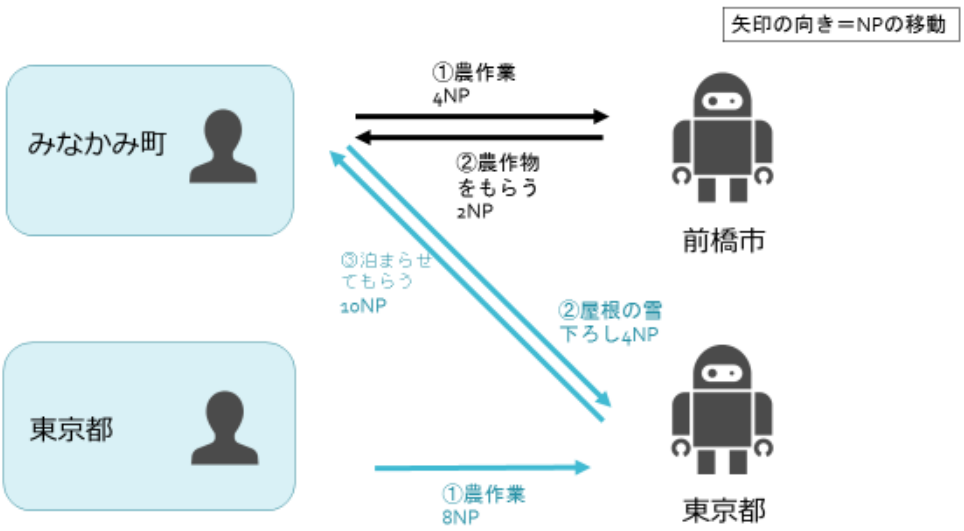
・ヨソモンは登録された農村の人たち一覧から、反対に農村の人たちはヨソモン一覧から、自分のできることを必要としている人を選び、農村ポイントを集める。

・してもらいたいことをしてもらったときは、その分の農村ポイントを相手に渡す。

（農作業をすることで、農村の人から2NPをもらう。このとき、依頼した農村の人は持ちNPが2減る。）

・NPを渡すときは、相手の対応がどうだったか、評価する。次回以降、今までの評価の平均点が公開される。

※飽くまで農村とその外との交流が目的なので、ヨソモン同士、農村の人たち同士のやり取りは不可としたい。



（２）　この仕組みの利点

・誰しも、親族や友人間等で対応できないことについて、誰か他人でもよいから協力を得たいという場面があると思う。しかし、他人にいきなり協力を仰ぐというのは通常は不可能。そこで、この仕組みを使えば、自分の貯めた農村ポイントを使って、気兼ねなく他人に協力を仰ぐことができる。

（３）　この仕組みの定着により期待する効果

・農村の人たちは前述したとおり、ヨソモンに対して抵抗感があるので、いきなりヨソモンを家に泊めることは嫌がると思う。しかし、例えばそのヨソモンが以前農作業を手伝ってくれた人なら、話は変わってくるかもしれない。そうして徐々にヨソモンに対する抵抗感が無くなっていく。

・ヨソモン側としては、農村の人との交流が増えることで、農業を身近に感じるようになる。親に連れられて子どもも小さいうちから農業に触れ、将来農業に携わりたいと考える人が増える。結果的に農村地域の過疎化が抑制され、食料自給率等も改善される。

・閉鎖的な農村から開けた農村となり、美しい農村の風景が保たれる。また、その地域ならではの風土や文化、催事等の歴史的に価値あるものが引き継がれていく。

3.　まとめ

農村地域の過疎化や担い手不足はまったなしの状況ではあるが、一朝一夕に解決するということは不可能なことであると思う。農村振興の様々な取り組みがなかなかうまくいかないのは、一部の人に負担が集中しがちであることや、農村の人たちの心に染み付いたヨソモン意識やそれによる農村の閉鎖的な雰囲気が理由として挙げられる。また、都市部の人の中にはそもそも農村や農業に興味すら持たない人が多い ということも問題である。

今回の仕組みは、皆の考えるきっかけになればと思い提案したまでであり、実際に機能させるには問題も多いと思う。しかしうまく機能すれば、時間はかかると思うが、農村の人がもつヨソモン意識、都市部の人の農業への無関心という根本的な問題を少しずつ改善できる可能性がある。また、ギブアンドテイクの仕組みゆえに、一部の人に無理な負担が生じるということもない。

「助け合いは大切」だと、誰もが分かってはいるが、助けられる側はもちろん、助ける側も「迷惑になるのでは？」と遠慮が出て行動に移せないものである。今回提案した仕組みが定着すれば、他人であった人が他人ではなくなり、いつかは農村ポイント無しに、本当の意味の助け合いができるような社会になるかもしれない。